



## 松

江算数活塾の特徴をなす活動のうち一つは、研修会である。初めは保護者研修会と名付けていたが、どうにもゴツゴツとした響きで取まりが悪い。せつかく算数に加えて落語と言っているのだから、寄席にしようということになった。活塾の活の字を「いき」と読ませて二つ重ね「いきいき寄席」と名付けた。月例でゲストを招いて話を聞く。

塾長からその提案を聞いたとき、ぼくは昔やっていらした「あくしゅの会」という月例会を思わないではいられなかった。奥出雲町に赴任したとき、ぼくの役割は同和教育(今の人權教育の前身)だった。小学校に所属してはいるが、授業時間はうんと少なくて、勤務時間の大半を人權教育に関する活動に充てなければならなかった。これまでの学級担任の仕事とはまるで違っていたが、戸惑ってばかりもいられず、とにかく何かを始めたくて地元の人たちの知恵を借りつつ作ったのが「あくしゅの会」だった。

人權に関わることであったら何でもよい。だれかに話題を出してもらって、それをもとに参加者で話し合おうと考えた。まだぼくも若くはあつたし、今思えばずいぶんと青臭いことをしていた気がするが、体力に任せて毎月ゲストを招いていた。少なくとも学校を異動するまでの七年間は続けたので、かなりの回数に上つ

た。ゲストは様々な人權課題の当事者だったり研究者だったりした。どうしてそんなことができるのかと不思議がられたりもしたが、依頼を断る人はめつたにおらず手弁当も同然で来てくださった。

毎回、ゲストや参加者から教わることは実に多く、自分が何も知らないことを痛感させられてばかりだった。ならば回を重ねるうちに知識も増え、感覚も磨かれて多少はましな人間になったかと問われれば、どうもそんな気がしない。そのうち、どんなに学んでも堂々巡りが関の山で、毎回新しい気持ちで向かうほかないのだ、と思うようになった。これは今でも変わらない。当事者に会う、話を聞く、本を読む、そうした行為に開かれていることが大事なのであって、それ以上の、例えば人權意識が高まったかどうかなど、問おうものなら煩わしいばかりでちつとも楽しくない。あくしゅの会では、エコーチェンバー現象(同じ価値観を持つ集団の中で対話を重ねることで価値観や言葉が先鋭化していくこと)は一切起きなかったが、これは人にも運にも恵まれた証拠だ。

「活活寄席」も「あくしゅの会」みたいに、向上とか進歩などに信を置かず、堂々巡りでよしとする人たちのゆるやかな連帯になっていくことを願う。会の詳細は、ホームページでご覧いただける。

## 空き家 10

## 木幡智恵美

## 生家②

家の中だけではない。庭もどんどん変わってきている。その中でも厄介なのが木だ。祖母が生きていた頃の庭は、現存する柿に加え、杏が幾本もあり、果樹園のようだった。幼い頃の記憶には、築地松に覆われているうえ、木々がうっそうと茂る薄暗い庭が映っている。それが、父が出雲に帰って事業を始めると、木が切られ、庭の大半を工場が占めた。

そのうち工場はほかの場所に建つたため使われなくなり、事務所は私の部屋に、がらんどうになった作業場の広い空間は地元の事業所の資材置き場として使われるようになった。

祖母が亡くなって間もなく私は進学のために家を出、卒業して帰ると、家は改装されていた。就職した年に父が亡くなり、母は家政婦として病院を転々とし、この家に人が住まなくなると、母が亡くなってから、母が存命中は、盆正月は休みを取って家に帰り、大掃除をし、家でも過ごしていた。娘が生まれてからも、時々里帰りし、この家に泊まることもあった。

そんな中、庭を囲む築地松が松くい虫にやられた。当時はまだ「松刈りさん」という築地松を剪定する仕事をする専門職がおられ、頼んでみんな切ってもらった。

「お宅の工場のトタン、放つちよくと、飛んでしまふよ」と近所のお年寄りに言われ、工場を壊したのは、母が亡くなってからだ。物の置き場が無くなったのでプレハブを建て、道路側には常緑樹のヒバを植えた。西側に残ったスペースには、大根や豆など野菜を少しずつ育てた時期もあったが、娘が中学生の頃、無花果を二本植えた。生き残った一本からは、三年前までジャムにするほど毎年甘い実がたくさん採れた。虫が巣食って朽ちた無花果に代り、退職した年に植えたキウイがこのところ毎年実をつけてくれている。

庭の真ん中のでえんと聳え、屋根の遙か上まで伸びていた杉が、屋根にもたれかかるように傾いたのは、平成三年九月、台風十九号に襲われた際。放っておくと、家がつぶさるそうなので、業者に頼んで根元から切ってもらった。

そして今、プレハブも無くなった庭に、いつの間に成長したのか、太い幹で、空に向かって無数に枝を広げる木が、杉に代わって聳えている。

30代フリーター 柄谷行人が哲学のノーベル賞といわれる「バーグルエン哲学・文化賞」を受賞したというので、朝日新聞が改めて彼の交換様式論を紹介していた。

年金生活者 柄谷は交換様式をAⅡ互酬（贈与と返礼）、BⅡ服従と保護（略取と再分配）、CⅡ商品交換（貨幣と商品）、DⅡAの高次元での回復の4類型に分け、これまでの歴史はA、B、Cの順に支配的な交換様式が推移してきたとしている。Dは支配的な交換様式になったことはないが、それは必ず到来すると柄谷は予言する。

そうした交換様式から観念的、あるいは霊的な力が生まれ、それが政治や宗教、文化など、マルクス主義でいう上部構造を形成すると彼は考える。Aからは「贈与されたら返礼せよ」と命じる霊的な力が生じ、Bからはホップスが「リヴァイアサン」と名づけた怪物的な力が、そしてCからは貨幣の力、マルクスが「物神」と呼んだ力が生まれる、と。

ことに後ろめたさ、負い目を感じ、子を庇護しないではいられない気持ちに駆り立てられる。

30代 系統発生のほうはどうなんだ。年金 人間が他の動物と同じように自然と一体化して生きていた人類史の段階を想定すると、人間と自然の関係は胎児と母胎の関係のようだったと考えられる。人間が木の実や動物をとって食べ、排泄する動作は、まだ採集や狩猟とは言えず、母胎と胎児が一体として繰り返す代謝に近い。それが可能だったのは自然の恵みがあり余るほど潤沢だったからだ。

だが、人口が増えると、その恵みに稀少性が忍び込む。ひとりの人間がひとつの木の実に、1匹の動物を手にする。ことは、他の人間がそれを手にすることを妨げることを意味するようになる。そこに競争関係が生まれる。それまで何もなくても与えられていた栄養は、自然に働きかけないと得られなくなる。自然が働きかけの対象になれば、人間はそれまで一体化していた自

30代 交換が力を生むとして、人間にそうした交換をさせる力はどこから来るんだ。

年金 柄谷はAについて「たんに人との間の同意や約束ではない、何か強制的な力」がそこにおいて働く」と言う（『力と交換様式』）。これは「強制的な力」、すなわち霊的な力が交換を強いると言っているように受け取れる。Cについても「交換」を「可能にする力」が不可欠」と書いている（同）。なぜなら、マルクスによれば商品交換は共同体と共同体の間、つまり見知らぬ者どうしの間で行われるからだ、と。しかし、Bについては国民に服従を、国家に保護を強いる力が何なのか述べていない。

30代 そこが物足りないところだ。年金 私の考えを言うと、交換を駆動する力の起源は個体発生的には生誕に、系統発生的には自然からの人間の「離陸」にあると思われる。

乳児は母の全面的な庇護なしには生き続けることができない。乳児は自分から離れるように。自然からおのずと離れていく。胎児が生誕によつて、それまで一体だった母胎から離れるように。

自然の恵みを手に行かざるかどうかは生死を分けることにつながる。それを手にしたほうの人間は、そのことに後ろめたさ、負い目を感じないではいられなくなる。それが贈与への衝動を生

を母胎の楽園からこの世界の荒れ野に追いやった母を憎みながら、他方で母の庇護を得るために、その見返りとして自らの愛らしさを母に与える。それをアメとすれば、泣き声はムチだ。自分を楽園から追い出した母が、自分への庇護を怠るとき、ムチ打たれるのは当然だという前提がそこにある。

それは一方で、乳児の中に後ろめたさ、負い目を生じさせる。庇護してくれる相手を攻撃することを意味するからだ。だから、乳児は笑みや睡眠を通して自らの愛らしさを懸命に母に与えようとする。後ろめたさ、負い目こそが、人間を贈与へと駆り立てるといえることができる。贈与と返礼から成る互酬制の起源をそこに見ることができ

る。この過程を母の側から見ると、次のようになる。自分が楽園から追い出したわが子が仕返しをするどころか、笑みを見せ、すやすやと眠り、愛らしさをふんだんに与えてくれる。母はわが子を寄る辺ないこの世界に追いやった

む。贈与と返礼から成る互酬制は、初めに贈与があつて、次にそれに対する返礼が続くのではない。贈与は返礼から始まると言わなければならない。

30代 ジイさんの言うとおりでとすれば、柄谷の交換様式論には空洞があるということか。

年金 たとえば交換様式BⅡ服従と保護（略取と再分配）の概念から導き出されるのは、国家の正体は経済だという結論だ。では、なぜ国家は経済の主体になり得たのか。その疑問への答えがそこにはない。それに応答しようとするれば、吉本隆明のように国家を共同の幻想としてとらえ、その幻想の力が国家をBの担い手たらしめたと考えられる。ほかない。

ただし、柄谷の交換様式論は、吉本の幻想をめぐる考察と矛盾するものではなく、Aは対幻想と、Bは共同幻想と、Cは個人幻想とそれぞれ相補的に対応していると理解することができ

る。吉本と対立した柄谷はその意味で吉本の達成の継承者と言つていい。

ニュース日記 880  
中村 礼治

## 交換の起源